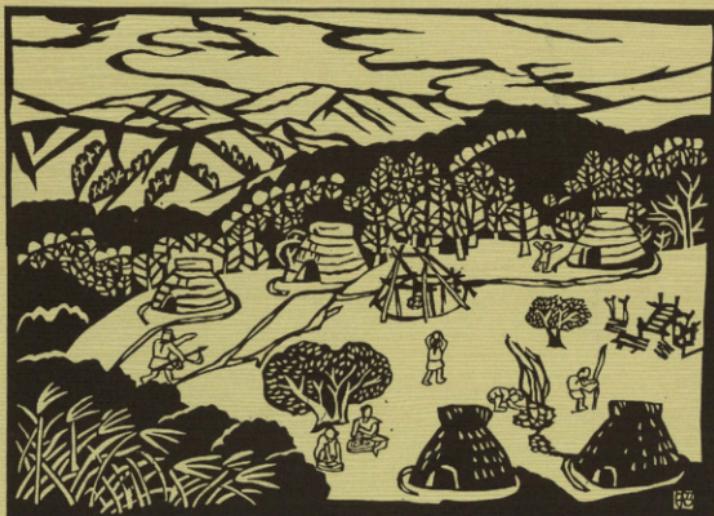


国竹遺跡調査

第3層(縄文早期)の成果



2006年12月

島根県

奥出雲町教育委員会

「国竹遺跡調査」の正誤表

お手数ですが、下記のとおり誤植を訂正願います。

頁	行	誤	正
12	19	50 cmほどの坑穴	50 cmほどの杭穴
12	20	底面の <u>坑</u> 穴	底面の杭穴
15	図3	「図中の注記が脱」	◎印 厚手（9 mm以上）
33	3	地山面に <u>剝</u> つて	地山面に至つて

序

国竹遺跡は、昭和62年、旧横田町の誘致する企業の用地として調査したもので、横田盆地を一望する台地上にあります。

当時耳目を集めたのは、1万年ほども遡る最古に近い様式の土器が多数出土して、地域の歴史の始まりを大幅に更新したことであり、中国地方でも屈指の遺跡とされました。

しかし、町にあっては時あたかも農地開発等の工事が相次ぎ、それに伴う遺跡の現地調査のみに追われ、成果のとりまとめや公刊がついに埋没して知る人ぞ知る遺跡として今日に至ったのです。

この貴重な文化財の調査成果を人々の記憶の彼方へ押しやることなく、20年を経た今、やっとここに一部分ながら集約し報告書として公刊する運びとなりました。

現地については遺跡の一部を残し、悠久の歴史を呼吸して頂くよう散策の場としています。出土した品をはじめその成果は、広く地域の学校教育・社会教育等にさらに活用されることを願うものです。

調査に直接間接に御努力いただいた方々のうちには既に故人となられた方もあるなど、時を経ての報告書の刊行は年ごとに難しくなりつつあります。

終りになりましたが、発掘調査からこの報告書刊行に至るまでの間、多くの御協力をいただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成18年12月

教育長 若槻慎二

例　　言

1. 本書は昭和62年に横田町土地開発公社の行う誘致企業の用地造成計画地内について、依頼により横田町教育委員会が行った「國竹遺跡」(横田町大字横田1375-1所在)の発掘調査成果のうち縄文時代についての報告である。

2. 調査の体制は、概要次のようにある。

調査主体　　横田町教育委員会　教育長　児玉哲郎

調査事務局　　尾方　豊（横田町教育委員会社会教育主事）

調査期間　　昭和62年4月23日～11月30日

詳細分布調査　　調査者　杉原清一　4月23日～5月7日

第1次発掘調査　　調査担当　蓬岡法暉　5月8日～6月28日

　　〃　吾郷和宏　7月1日～9月8日

　　〃　吾郷和宏　11月5日～11月30日

調査員等　　小川睦美　小川昭男（横田町社会教育指導員）

調査指導　　島根県教育庁文化課　田中義昭（島根大学）

3. 調査協力　　三浦　清・大西郁夫（以上島根大学）　国学院大学学生有志

　　宮本徳昭（八雲村教育委員会）　宮沢昭久・ト部吉博（以上島根県教育委員会）　藤原友子（三刀屋町）

4. 文中における町村名は原則として合併前の旧名とし、関係者名の（　）内は当時のものとする。

5. 本書は尾方豊氏の寄稿を得て、杉原が執筆・編集した。また挿図等の版下トレースと編集には藤原友子が、原稿の清書には栗原久美子が協力した。

目 次

表紙 切り絵 “国竹遺跡のくらし”

(故) 小川昭男 (調査補助員)

序

奥山雲町教育委員会 若槻慎二

例言

寄稿 国竹遺跡発掘調査の経緯と経過

(元) 横田町教育委員会社会教育主事 尾方 豊 … 2

第3層（縄文早期）の成果

杉原清一 … 7

はじめに	7
I 位置と環境	9
II 調査結果の概要	10
III 遺跡の土層と地質	11
IV 第3層に関わる遺構と遺物の散布状況	12
V 遺物 —土器—石器類—	15
VI むすび	33

図1 国竹遺跡地質図	11
2 遺構と遺物散布状況	13~14
3 押型文椎円粒径分布グラフ	15
4 土器(1)	17
5 " (2)	18
6 " (3)	19
7 " (4)	20
8 " (5)	23
9 石器	31
10 霧石伯備作地方の主な押型文の遺跡	33

表1 取上げ時集計表

15

2 古器観察表

26

3 刃片の観察

32

… 33

国竹遺跡発掘調査の経緯と経過

元 横田町教育委員会社会教育主事 尾 方 豊

懸案であった国竹遺跡の発掘調査の一部が報告書としてまとめられることになった。当時事務方として係わった者の一人として発掘の経過を中心に記してみたい。

私は、この調査の翌年に教育委員会から異動をしており、手元には何の資料もない。幸い昭和62年の島根県文化財保護担当者の研修会で事例報告をした内容が当時の『季刊文化財』に掲載されている。その内容から発掘経過を再構成することとした。

(開発計画の発表)

昭和62年4月1日、横田町の昭和62年度重点施策として「町を見下ろす中山台地に誘致企業による工場の建設が行われ、その用地の造成工事に着手する。」旨の発表があった。この日から同年11月30日までの8か月に渡り、国竹遺跡の発掘調査が始まることになる。

事業計画発表後、横田町土地開発公社からの開発協議を受け現地踏査を行った。予定地に一步足を踏み入れ、入り口あたりの露出している地面を見ただけで、弥生式土器の破片を採取することができ、地形的にも住居跡等がある可能性が極めて高いと判断された。翌日には「文化財包蔵地として確認した」旨踏査による調査の結果を回答し文化庁には遺跡の発見通知を提出した。

一方で工場用地の造成は既成の事実として準備が進められていく。上地開発公社からは、「法的な手続きは遵守して行うので教育委員会の責任として、工事が遅れることのないよう対応してほしい。」と強い要望がなされ、結果的に開発に必要な発掘調査をすることを前提にその準備に取り掛かることになる。しかし当時の横田町教育委員会には発掘調査担当者の配置はなく、今までの横田町における発掘調査を中心的に担ってこられた杉原氏も、この時点では年内の予定がすべて決まっており調査担当者として調査していただくことは不可能であった。開発公社からは早急に開発協議に入りたい旨の申し出が続くが、教育委員会としては調査体制の目途がまったくたたず、協議のテーブルにつくことすら出来なかった。

その後、県教委との非公式な協議や指導を受けながら、八雲中学校教頭の蓮岡氏に調査をお願いすることとし、5月2日に初めての敷地造成にかかる協議を県教委、発掘担当予定者、町開発公社、教委担当者の出席により聞くことができた。

協議の席上では、貴重な遺跡であることが予想されること、横田中学校の向かい側であり文教地域であること、景観上の問題、などから工場適地ではなく、他の土地を求めるべきではないかといった意見を述べる一方で、工場を立地するにしても現計画では調査が不可能であることなどが話し合われた。しかし企業誘致に係る公共性が極めて高い工事であること、進出側の希望もあり他の用地は考えられないといったことから、工場建設を600m²に、造成面積は1,000m²に限定す

ることで、必要な調査を行うこととした。

(1次調査)

一次調査（試掘調査と位置付け）では、縄文時代早期の土器片約100点をはじめ、縄文から弥生時代にかけての石器類、弥生時代後期から古墳時代初期にかけての土器約2,500点の遺物が出土した。さらに竪穴住居跡や溝状の構造も多数確認された。縄文時代早期から古墳時代にまたがる出土品の多い複合遺跡とわたり「狩猟、採集で生活を営んでいた縄文人たちの生活ぶりや農耕社会へと進歩していく過程が理解できる貴重な遺跡」であることが確認できたので、若干の追加調査を行い、7月15日に取扱い協議を設定することとした。

しかし、その取扱い協議をまたず、7月6日には一方的に当該地の造成工事にかかる入札が実施された。さらに、入札の際の工事概要では、今までの協議を無視し、全て切り土により2,000m³を造成することとなっていた。同時にテレビニュースにおいて、今回の誘致企業は島根県と横田町の誘致企業であると調印が行われたこと、具体的な造成面積、工期などが報じられた。いうまでもなく、遺跡の取扱いについては保存も含め、試掘が終了したこの時点から協議が始まることになるのだが、それらを無視し既成事実として具体的な造成計画と工場建設計画が公にされたわけである。

これを受け、7月9日には県文化課と県の商工労働部（県と横田町の誘致企業であることから、これ以降県の商工労働部を交えての協議となる。）、町教委の間で、さらに翌10日には横田町土地開発公社を加えて事前協議を行うことになる。

7月15日の協議は扱い協議ではなく既成事実として示された造成計画に対して、教育委員会サイドが発掘調査という形でいかに協力するかを問われたことになる。

(2次調査)

前述の協議で示された開発計画の変更は、

○計画面積

工場用地造成面積	1,000 m ³	⇒	2,000 m ³
内工場建物	600 m ³	⇒	1,000 m ³
進入路		⇒	760 m ³
計	1,000 m ³	⇒	2,760 m ³

○調査終了期限

12月15日 ⇒ 10月31日

であり、これに基づき造成工事については7月20日までに表土除去をし遺構確認。そして8月6日までに調査を終了することが求められた。さらに進入路部分については、別件として調査を実施し別途協議することとなった。

しかし、この協議結果に沿っての調査は現状の体制では不可能に近かった。調査体制を抜本的

に立てなおす必要があった。そこで国学院大学から学芸員や調査経験豊富な複数名の学生の協力を得ることになる。また、併せて島根大学を卒業後、研究室で発掘調査の手伝いをしていた吾郷和宏君（故人）を臨時職員として雇用し、早速調査体制の中に組み込んでいった。

協議の翌日には開発公社から発掘通知の再提出があり、第2次調査に着手した。

概ね調査の日途が立った7月26日には第2回目の現地説明会を行ったが、100名を超える町民の皆さんに集まっていた。そして、予定通り8月5日には遺跡の取扱いについて「工場敷地部分については、1号住居址・2号住居址及び墓壙様の遺構の埋め戻し保存をする。」こととし、8月7日には横田町と地開発公社に対し文書での回答を行った。

その後、造成工事が始まろうとする中、継続して進入路部分の調査を実施し9月5日に県文化課、横田町、町教委、調査担当者により最終の取扱い協議を行うことになる。

9月5日の最終取扱い協議の席上では、該地においての2,000m²の用地造成と1,000m²程度の建物建設及び進入路の造成について話し合い「事業の公共性からして開発はやむを得ない。」との結論を見た。しかし周辺部分の開発については、埋蔵文化財の包蔵地であるので、「その保存・保護については町所有地として管理するなどの配慮を必要とする。」こと、「埋め戻し保存をした遺構についても活用の方法を検討する。」などを両者で確認した。これらをもとに、9月8日に県教委に文書協議を行い、9月9日付けで県の回答書を添付し開発公社に回答することになる。

（3次調査）

さて、一応の終結をみた1次調査、2次調査であったが、課題として残った遺跡の活用を話し合うために10月9日現地において会議をした際、新たな問題が出てきた。それは周辺部分（工場東側）を駐車場用地として会社が取得を希望していることである。当然会社所有地となった部分については、将来にわたって町民が自由に入り出することは難しくなる。そこで、遺跡の活用をするためにも、会社が取得をしようとする範囲を限定し、公園として整備する部分を早急に特定する必要が生じた。教委としても、現状では具体的、現実的な公園の整備計画を立案し、実行することがよりよいのではという判断に立ち、駐車場部分は、現状を変更しないで整地し会社が取得することとし、既に遺構を確認している部分には盛土をして遺構を保護し整備。さらに南側の部分は町有地のままとし公園として整備する。そして、公園部分と会社所有の駐車場部分との境界を明らかにするため一部現状の変更（発掘調査）を行うこととした。

この調査が第3次調査であり、工場の建築工事が進む傍らで、11月7日から同月30日まで行った。

（まとめ）

以上が3次に及んだ国竹遺跡発掘調査の経過である。4月以来、文化財保護行政部局である教育委員会に対しては、なし崩し的に開発計画が示され、最終的には「工事の公共性」を最優先し開発のための調査を行った結果となった。しかし、この国竹遺跡の発掘の経過はその後の横田町の文化財保護行政に大きな影響と教訓を与えたと考える。

当時、教育委員会側の課題を次のように整理している。

- ①平素より開発関係各課と綿密な連絡が取られていない。庁舎の中で開発事業を計画段階でチェックする仕組みができていない。
- ②文化財担当者が配置されていない。
- ③行政サイドに文化財保護（行政）に対する理解を求める活動がなされていない。
- ④ある程度分布調査は行われているが、その周知の方法に問題がある。
- ⑤教育委員会のそれぞれの職員が自らの問題として文化財保護行政に理解を深めていくことが必要。

特に⑤についてであるが開発協議を続け、調査体制作りに奔走する中で、「教育委員会の仕事、あるいは文化財を保護するということはどういうことなのか。」「教育委員会の役割は何であるのか。」を教育委員会というチームで押さえておく必要を痛感させられる場面に何度か遭遇した。季刊文化財には「教育委員会の主体性とは何なのかをチームとしてしっかり押さえておく必要がある。」と発言しているが、自分自身忙しさの中で、文化財保護行政に十分な取り組みができる理由を、つい人が足りないとか、担当がないとかの言い訳をしてしまうこともあった。また、協議を続けていると一般行政の職員からも、時には同じ教育委員会の職員からも、「教育委員会も町職員の立場でものを考えてもらわないと困る。」さらには「発掘などのために、1千万円以上の税金を使うとは...」などとも言われたこともある。しかし、教育委員会職員の町職員としての立場とは、教育委員会の中で教育行政の担当者として何を考えるのかでしかない。このことをチームとして押さえていかないとそれぞれが消耗していくことになる。

協議を重ねる度に「開発のための発掘調査」としての色合いが鮮明になっていた国竹遺跡の発掘調査であったが、快く調査担当を引き受けくださった蓮岡氏、調査補助員の中村睦美女史、忙しい中他の現場の合間を見て朝夕適切な指示を与えるとともに、積極的に調査にかかわってくれださった杉原氏と藤原女史、調査指導の範疇を超える親身になった相談・ご指導を下さった県教育委員会文化課の宮沢、卜部両氏（宮沢氏には、調査員の確保が困難を経た際、極めて異例ではあるが県の調査現場から調査補助員を派遣してくださるとともに、大学の後輩の手配までしていただいた。）東京から駆けつけてくださった国学院大学の皆さん、県教委の現場から手伝いに来てくれた宮本氏、そして時間に追われながら炎天下で作業を続けてくださった調査員の皆さん、同時に進行していた町内の他の発掘現場を担当することで間接的に国竹遺跡の発掘を支援してくれた、当時八雲村教育委員会の宮本氏、机上の事務を止めて現場のマネージャー役に徹してくださった小川社会教育指導員（故人）などなど、多くの人の文化財保護に寄せる思いに支えられた調査であったことを鮮明に覚えている。

また、大学を卒業後、加茂町と松江での生活を続けていた吾郷君にとっては、7月に突然松江に押しかけて行き「明日からでも横田町にきて、発掘の仕事をしてほしい。」という申し出には戸惑いも多かったと思う。私が会った日は教員試験の行われた日だと後から聞くことになる。彼

にとっては大きな人生の転機であったと考えるが、短時間に決断をし第3次調査まで中心的にかかわってもらうことになった。心からお礼申し上げたい。

*ご承知のとおり吾郷君は、その後横田町の職員として多くの調査にかかわった後、請われて加茂町に帰り、加茂町教育委員会の職員として加茂岩倉遺跡の発見と調査・保存に大きくかかわることになる。そして、本年あまりにも若くして、突然の死を迎えられた。心よりご冥福をお祈りしたい。

第3層（縄文早期）の成果

杉 原 清 一

はじめに

国竹遺跡調査の担当者は詳細分布調査から順次3名が関わった。またこの間において立地の地質・上層については島根大学三浦清教授（当時）・他に依頼して検討していただいた。

一方で調査体勢も不充分であり、町にあっても専任調査員を新しく任せ、或は夏季休暇中の国学院大学の学生等、数名の応援を得て進められた。

遺構・遺物は厚さ70cm以上にも及ぶクロボク土層中に在り、その上～中位（第1・第2層）では古墳前期～弥生中期の住跡や土器・石器等が、クロボク土層下面から下のローム層に移るあたり（第3層）では縄文早期の押型文土器や柱穴状ピット群等を検出した。

この成果のまとめを関与した3名で分担すべく約し、筆者もその一端を担って若干の資料集約を行っていた。以来、時すでに20年を経たが未だ遺跡調査行程の完了には至っていない。但し、1991年中四国縄文研究会（於広島大学）で一部を披露し、故人となられた潮見浩先生をはじめ、多くの方から御指導を得た。

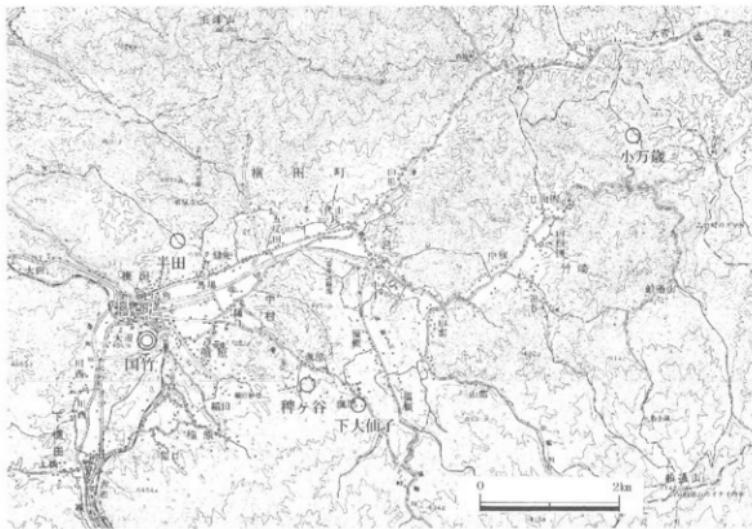
ここに、手もとに残る資料と記憶をたよりに、不完全ではあるが早期縄文土器を中心に、資料のほぼ揃う概ね昭和62年8月末時点での第3層に関わる概要報告を記し、遺跡発見の端緒である分布調査を行った者としての責としたい。

本年早春より草稿に着手し、遅々ながら運筆中の5月、この国竹遺跡調査を中心となって担当し進めて来た吾郷和宏君が急逝した。彼は、現地調査後数年ならずして任地を転じ、加茂町そして雲南市の教育委員会にあって、かの岩倉銅鐸の第一発見者となって以来各方面に亘って多忙を極め、当国竹遺跡の成果もまとめには至っていなかったのである。

本稿を草するにあたり、不明や記憶の定かでない点は彼に聞けばよい、と思いたったのであるが、今やそれは不可能になった。

以下、不備の謗りは免れ得ないが、可能な限りにおいて記述し集録して彼の存念の一端としたい。

（2006. 6記）



○印 横田町押型文土器出土地点

位 置 図

I 位置と環境

国竹遺跡は出雲の奥まるところ、斐伊川上流横田盆地の南西端に張り出す丘陵上（三浦氏は高位段丘と呼ぶ）にあり、眼下直近には横田中心部の町並みが展開する。東は盆地の水田地帯が斐伊川をはさんでひろがり、その奥には鳥取県との境にあたる『出雲國風土記』他に記載する鳥髪山（船通山）が大きく横たわる。

調査地点は横田町大字横田1375番地1・他（山林）で北緯 $35^{\circ} 10' 20''$ 東経 $133^{\circ} 05' 48''$ に位置し、通称“横田測候所跡”及びその付近であり、眼下の町並みからの比高約40m、標高370～380mである。

広く奥出雲地方は製鉄のメッカとも呼ばれ、たら遺跡が夥しく散布するが、その数は未だ明らかでない。

この横田盆地をとりまくそれぞれの丘陵端あたりには、主に弥生時代から奈良時代までの遺跡が多数あり、山間部としては格別に密な分布を示している。

特に弥生中期の土器様式は山陽との関わりを示すものとして、二次大戦後早くから注目されている。

また、古墳時代後～末期の横穴式石室の袖無し形平面プランや、横穴墓の三角テント形玄室など、地城色の強い地帯でもある。

このほか、山間深く縄文期の土器出土地点が点在し、特に横田町は早期押型文土器片は早くからその出土する地域として知られ、また後期の磨消縄文土器も片々と出土するところもある。これらは概して県境近い奥山間であり、定住を示すものではないようだ。

なお近年に至り、斐伊川をやや下って中流域あたり、旧仁多町から木次町にかけて尾原ダム建設関連で川沿いでの調査が進み、川岸近くで多くの後・晚期縄文遺跡が調査されつつある。これらはその範囲や規模も大きく、内容も豊かで定住を如実に語りかけている。

註1 杉原清一「横田町の縄文早焼押型文土器」『鳥根考古学会誌』第1集 1984年

註2 杉原清一『下大仙子遺跡発掘調査報告書』横田町教育委員会 1985年

II 調査結果の概要

調査対象地が拡大されつつあったが、調査を開始して3ヵ月の昭和62年7月末の中間報告で、発掘面積約1500m²での成果の概要は次のように記している。なお（ ）は私註である。

※土層と遺物の出土	クロボク土上～中層…………古墳～弥生時代 黄褐色土（ローム）上面……繩文時代早期
※出土遺物	土器（片） 約4500点（内早期繩文土器約400点） 石器等……石斧、石鎌、砥石、剥片等
※遺構	竪穴住居跡 2 (内訳) B 6 区4.5×4.5m 円形、主柱4、中央ピット、古墳前期 C 8 区4.0×4.0m 隅丸方形、木炭・粘土塊等、弥生後期 柱穴状の列 2 (内訳) C 4 区 (延長) 約17m B 5 区 (延長) 約8m 掘立柱建物跡 1 D 4 ~ D 5 区 4.2×3.6m

墓坑様の遺構

※その他	E 8 区 上面に石あり、 弥生後～古墳前半期 C 4 区、 B 4 区、 E 4 区……陥穴と考えられる遺構 3 B 6 区 ……住居跡付近に溝状のものあり (他に) ……柱穴様のもの多数
------	--

※（出土遺構の内容）

A繩文時代	押型文（山形・捺円）、条痕文、繩文、無文の土器
-------	-------------------------

B弥生～古墳時代

弥生式土器、古式土師器（壺かめ類 — 多くは細片、スタンプ文あり—）

C石器類

剥片（石英、黒曜石）
石鎌
石鏃（黒曜石、安山岩）

III 遺跡の土層と地質に関して

依頼して行なわれた三浦氏及び大西氏の現地調査の結果報告書等^{註1,2}から誤解を惧れず若干の事項を列記してみる。

この遺跡はS U P (三瓶浮布降下軽石層) 上面の風化したローム層上に堆積した厚いクロボク層中に存在している。このクロボク土層の中位あたりにはアカホヤ火山灰 (Ah) の混入が認められた。

また、発掘調査地点から約30mの横田中学校敷地の切崖面での観察から、母岩の花崗閃緑岩の上に段丘礫層、段丘粘土層、さらに上へ、D M P (10~12万年前)、S K P (8~8.5万年前)、S U n (4~5万年前)、S I P (2.5~3万年前) と堆積し、アイラ火山灰 (2.5万年前) を挟んでS U P (1.5万年前) が積っていると報告された。

なお、各報告に記載の地質柱状図は、図のようである。

国竹遺跡の発掘調査では、遺物の包含層を次のように区分して行った。

第1層 表土直下~クロボク土層上位 第3層 クロボク土層下位~淡褐色ローム層上面 (土色漸移層)

第2層 クロボク土層中位 第4層 明るいローム (無遺物の地山)

なお、このクロボク土層の厚さは概ね60~80cmであった。

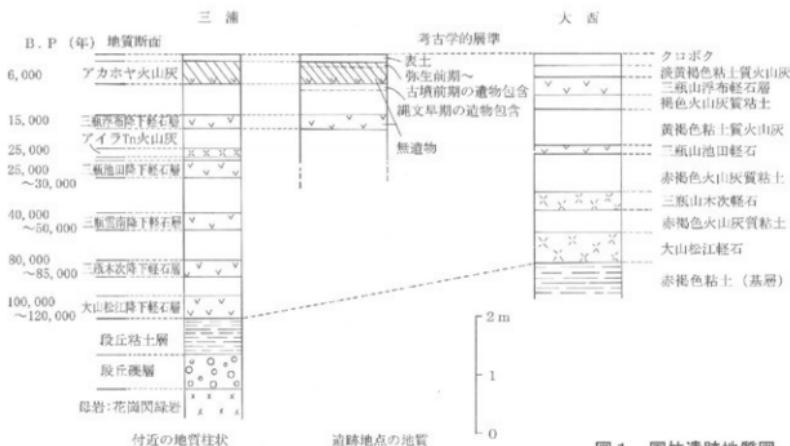


図1 国竹遺跡地質図

註1 三浦清・吾郷和宏：「テフラの産状から見た島根県横田町国竹遺跡」『山陰地域研究』第4号島根大学
1988

註2 大西郁夫：「横田中学校北方の火山灰層」(町教育委員会宛報告) 昭和62年11月

IV 第3層に関わる遺構と遺物の散布状況

ローム質地山面にみられる落ち込みやピット等はかなりな数であるが、これらがクロボク層中のどのレベルから掘り込まれたものは判別が至難であり、結果としてローム地山面に達したものと検出記録している。

そこで、伴う遺物等によって明らかに弥生時代以降と判断される住居跡や土壙等を除いたのが第3層に由来するものと仮定して図示することとした。なお、第3層に起因する遺構の場合、その落ち込み十が上層土と異なり淡い色調として判別出来るかとも思われるが、記録図上には主観的記入が多く、或は無記入などであり、これによる判断は不可能であった。

小柱穴状ピットはB～C列4～6区あたりに顕著であるが、その多くは配列プランが明瞭でない。そのなかで、No 1とNo 2の円形プランや、柵を想わせる直線配列が想定される。また陥穴遺構も第3層に由来するものであるようだ。

プランの概略

柱穴円形プラン No 1 (D 3・4 区) 直径1.1～3.6m 柱間隔1.2～2.4m 柱穴数9. 円形。

No 2 (C 5・6 区) 長径9.0?m 短径5.6m 柱間隔1.1～2.5m 柱穴数7～9?

柵状柱穴 A 直線 全長20.8m 柱穴数9 柱間隔1.7(緩斜面)～3.0(フラット面)m

B 直線 全長 8.8m 柱穴数5 柱間隔1.6(緩斜面)～2.5(フラット面)m

陥穴遺構4穴は東西に分かれるものの地形を横断する一直線上に配列している。概測値のわかるB 4区のものについてみると、配列方向に長い1.4×0.8mの小判形で、地山への掘り込みの深さは約1.0m、底面は平坦に近く、中央に直径約17cm深さ50cmほどの抗穴が1穴穿ってある。

他の3穴については数値の資料が見当たらないが、ほぼ同様とみてよからう。但し底面の抗穴が小さくて5本あるもの(E 4区)もあった。

検出土器片はすべて縄文早期に属するものであり、散布状況には部分的に密度の濃淡が認められる。密に分布するところが9ヶ所程度挙げ得ることから仮りにこれにもグループNoを付した。

また、円形をなす柱穴プランは平床住居跡かと思われ、これと土器散布を重ねてみると、プランNo 1の周辺にはグループNo 1～No 4があり、プランNo 2近くにはグループ7が該当する。グループNo 9・No 5・No 8は明らかに別群であるが、グループ6はいずれのプランに関与するとも言い難いようだ。

石器等は第3層から出土の明確な品は極めて少く、石鏃2点(他の1点は出土層がやや不明確)石錘2点で、剥片類が10点余りである。

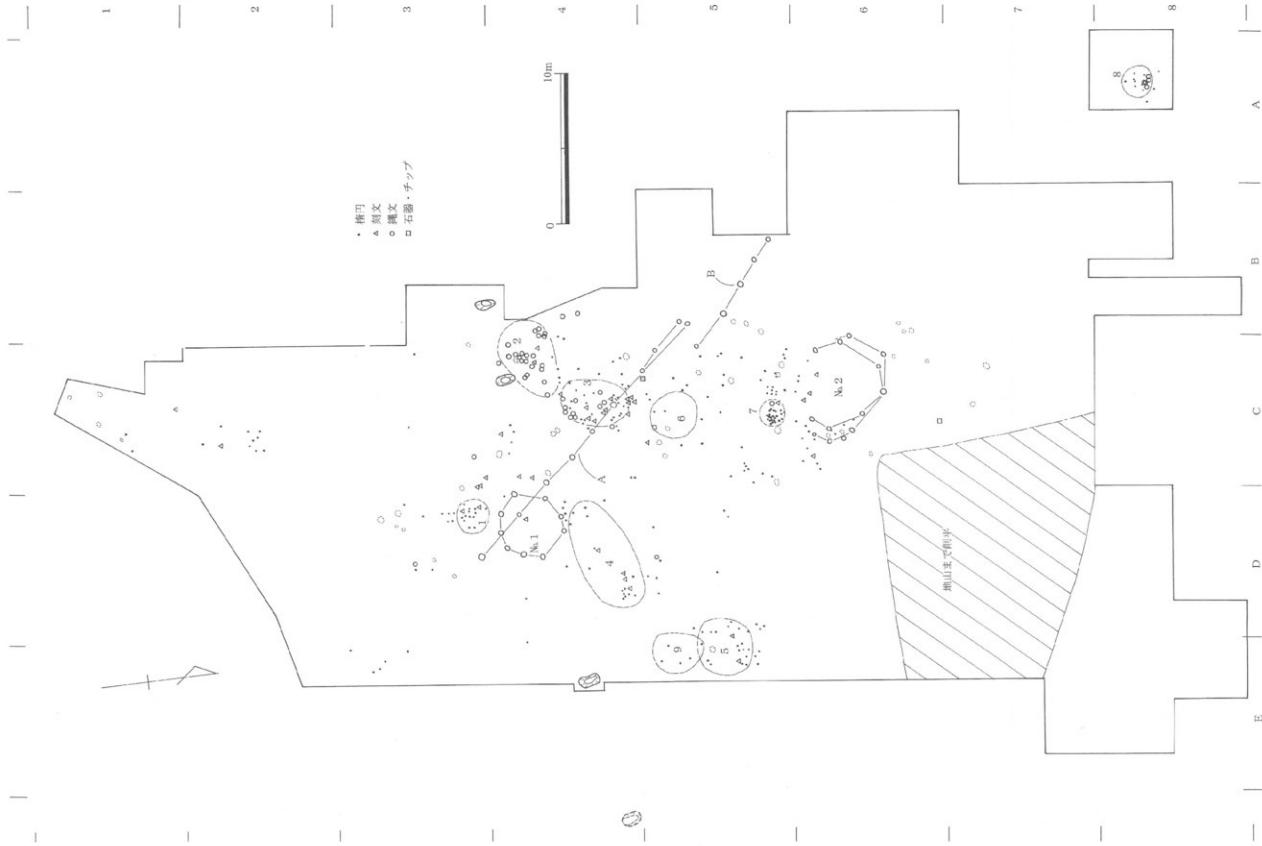


図2 遺跡と遺物散布状況

V 遺 物

1 土器

第3層（クロボク土層下位～淡褐色ローム上面）から出土した土器のほとんどは押型文で、若干の縄文や条線文の破片であった。これを取り上げ時の施文所見によって区別に略集計した第2次までのデータ（昭和62年8月末現在）があるので下に示す。

表1 取り上げ時集計表

	A8	B4	B5	B6	C1	C2・C3	C4	C5	C6	C7	D3	D4	D5	D6	E3	E4	E5	E6	E8	計
楕円文	11	2				13	2	20	44	14	19	25	14		5	20	3		192	
刻文					1	1	4	17	4	5	5	2	1			1	1		42	
縄文	7																		7	
無文								21		2	7	4	5						39	
山形文								5											5	
豪	7							16											23	
土器小計	18	9			1	14	6	79	48	21	31	27	19	5	5	21	4		308	
石			1					2	3	3					1	1			10	
磨よう石				1				2	1	1					1				8	
その他チップ				1			1	4		3	2		2						12	
石器等集計					1		1	6	5	7	1	2	3	2					30	
合計	18	9	1	1	1	14	7	85	53	28	1	33	27	22	7	5	21	4	1	338

※ 他にC4区 楕円・刻文 100点あり

このようにほとんど全区において楕円文と刻線文、或は両者を併せ有するものが大多数で、80%以上である。次いで縄文、山形文となっている。無文は極く少数で、たまたま表裏無文の部分

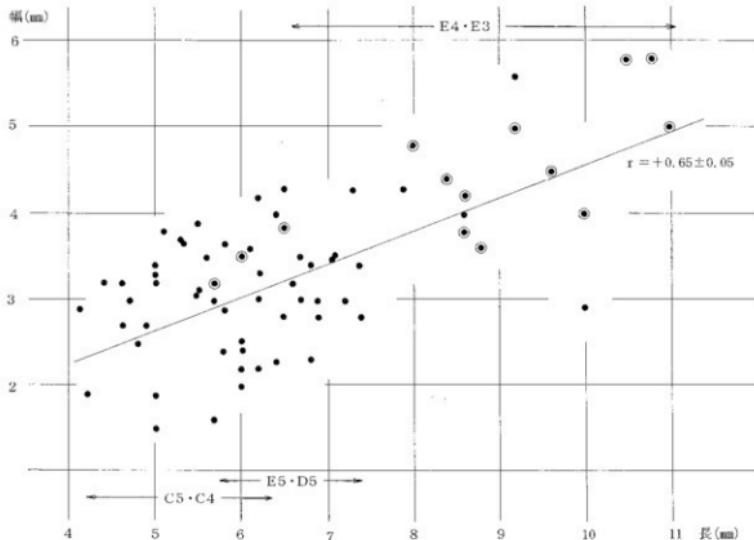


図3 押型文 楕円粒径分布グラフ

であることも考えられる。

このうち最も多い楕円文について、施文原体等の検討材料としてその粒の長径と短径の相関を押捺の明瞭な破片69個の器表の施文でみた。

出土した土器片は大まかに次のように区分して配列し、図示した。これにほぼ沿って見てゆくこととする。

押型細～中粒楕円文・刻文……A～A'	縄文……C
押型中厚中粒楕円文・刻文……B	条線文…E
押型厚手大粒楕円文・太条線…G	無文……F
押型山形文	…D

A 楕円押型文土器

1は6破片を図上復元したもの。まとまりの出土、焼成良く堅い。器壁は6mm弱で薄く尖り底で口径23cmほど、器高は18cm程度で鉢形。口縁部は外反し波状をなす。施文は外は全面を原体回転による楕円文をほぼ横に、底部付近は斜～縦に施す。口縁内面は平行な刻線³³を2段に原体回転によって押捺する。この2段の押捺を外面から指頭でえながら行うことで口縁部が2段に外反することになり、また外面の楕円文は圧迫な状に消えている。刻線は口縁からほぼ垂直で、幅隔3mm強、深さ0.7mm、断面はU字形に近い。この刻線の施文は5条が単位の原体かとみられる。

この刻線部の下地はヨコに楕円文帯であり、これが刻線施文に先行して施文されている。

以下体部から底部まで入念にナデ調整している。なお内底面には炭化物の付着が認められる。

2は底部を欠くが、器形は1とほぼ同様であり、口縁の外反は弱く1段である。胎土には微細砂を多く含み、焼成良く堅い。勧斑もある。器壁は1より若干厚い。口縁内面の刻線は1段で、その下方に幅4cmほど楕円施文帯があることで1と相異するが、その他については1と同様であり、胴外面の楕円文や内面の刻線は、いずれも施文原体をヨコ方向に転がしたものとみられる。

3～6、8、12、21、24、26は口縁端部片で、1或は2とほぼ同様であるが、口縁端を尖らすもの。丸味のもの、及び平坦にナデするものがある。

7、9、14、27、29、30、36はこれに続く体上部位置で、内面楕円文からナデ部へ移るあたりの破片で、外面の楕円文はやや斜行気味となっている。

10、11、13、15、28、31～35、38～40はすべて内面ナデ、外面は楕円文が斜～縦位施文の体部片である。このうち、31、35、38は器壁が厚いが、他は薄手～中厚である。

16は底部片で乳頭状の尖り底である。外面は磨耗もあり鮮明ではないが楕円文が引きずり或は重複して施文されている。

上記のうち26～28の3片は、胎土や焼成・出土位などからして12と同一の個体とみられる。

註3 原体刻文・刻線文・平行短線などと呼称されているが概ね同一のものであり、ここでは刻線とした。

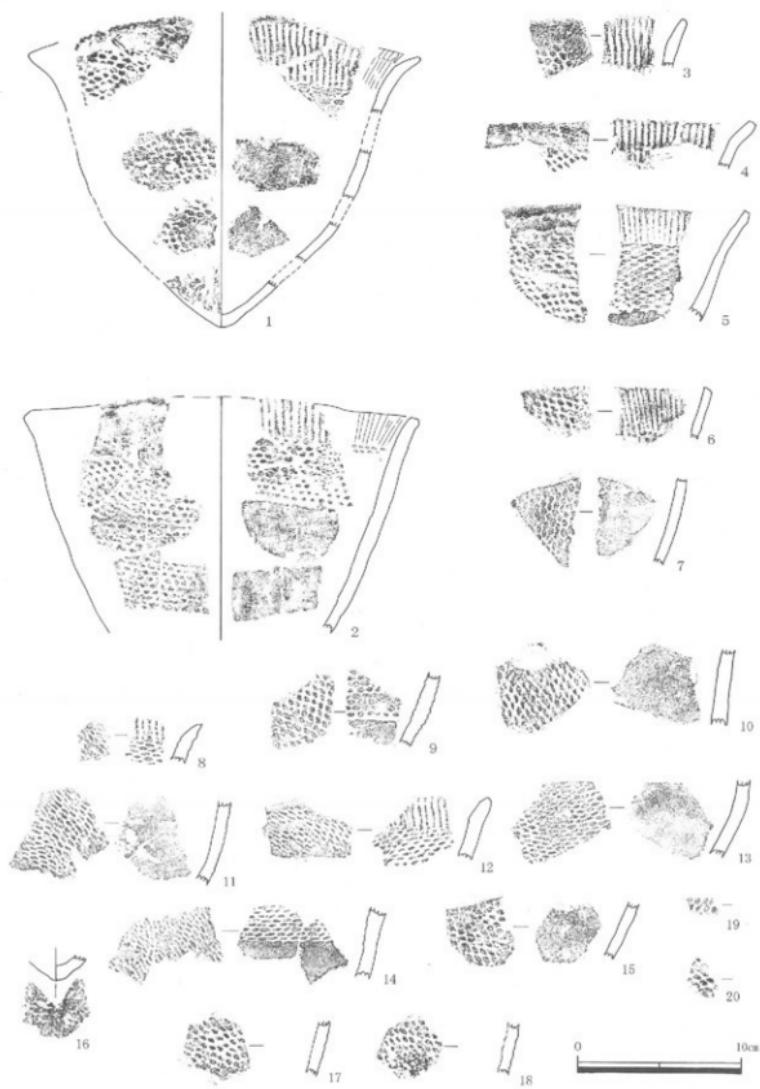


図4 土器(1)

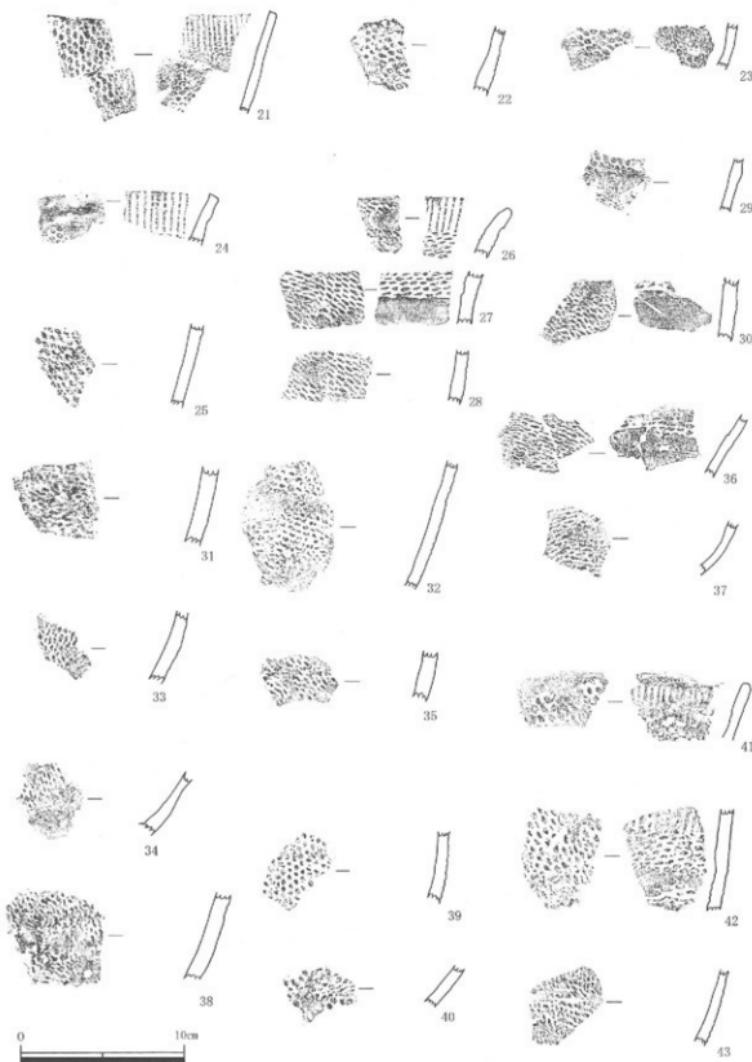


図5 土器（2）

また、11、12、14、26~28、30~37などは外面の施文楕円の形が細長くやや密であること、或は施文原体を引きずり気味にしたかと思われる形であり、何よりも器壁の厚さが他より厚く8mm前後であることなどから、Aとした1や2とは幾分相違するグループとすると、これをA'タイプと呼ぶことも可能かと考える。41~43はやや離れた地点での出土であるが、中厚手で施文も類似しており、よりA'グループに近い。

44、46は中厚手の口縁端部である。口唇はわずかに短く外反し、上面を平坦にナデ、外面側がわずかに肥厚気味になるもの。44の内面の刻線は短く、それに対応する外面はヨコナデであるが、46は円外面ともに上端まで楕円押捺であり、刻線や外側面のナデは無い。49はやや薄い口縁で上端を平坦にナデしている。内面に楕円押捺のうち刻線を3cm以上長く施文し、外面は細い楕円文が引きずったような崩れた施文となっていて、一見Aグループかともみられるものである。

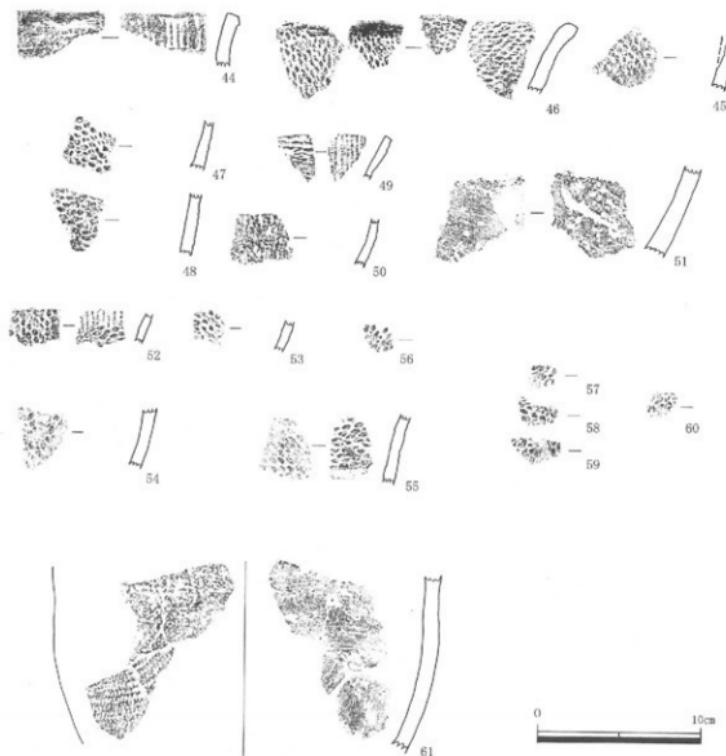


図6 土器(3)

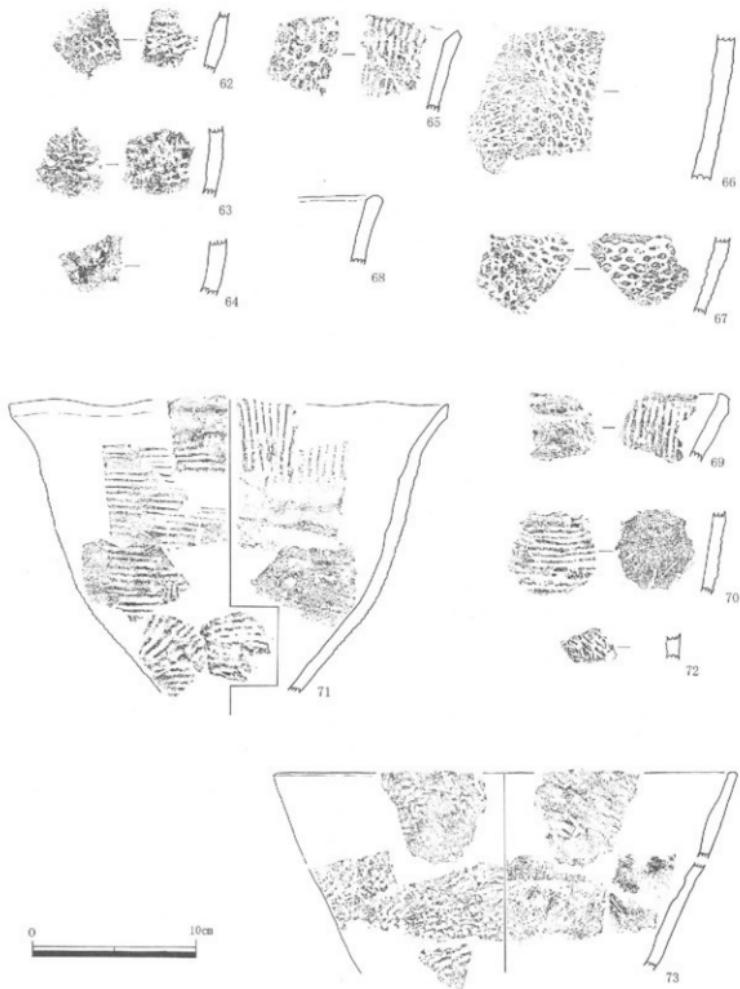


図7 土器(4)

45、50~55はやや薄手でA'グループに近い。46~48は同一個体で、器形は明らかではないが器壁はやや薄く、外面にはススの付着が認められる。

以上のように後半に挙げたものは、明確ではないが、仮りにA'グループとした様相のものに近い。

B 中厚手楕円押型文土器

器壁の厚さ8～9mm程度の楕円文に着目して挙げてみる。

62、63、65～67は口縁～体部の破片で楕円粒はAよりやや大きめである。65の口縁内側は2段の刻線で、口唇部は短く外傾して尖る。外面は縦走する楕円文で口唇近くは指頭押圧により消えている。胎土はキメ細かいが粉質状で灰白色を呈し脆く他のものとは異なる。他の体部では、外面の楕円粒径がやや大きめでヨコまたは右下りで粗粒区々であり、重複押捺もある。内面は部位によるものと思われるが楕円文とナデ無文がある。66の胎土には若干のセンイ痕が認められる。

C 縄文土器

61は外面全面が縄文の器の体部とみられるが、器形は明確でない。器壁は厚く胎土に砂粒は少ないが若干のセンイが入っている。外面はR縄文でやや太目、内面は肌荒れしているがヨコナデである。外面にはススが固着している。

ここに図示した以外に同一地点で縄文地の細片17片が同時出土しており、同一個体とみられる。これらはいずれも厚手で、胎土には砂が少なくセンイの痕跡が明らかである。

D 山形文土器

73は原体回転施文による山形文の土器である。口径24cmほどの体部から直線的に開く鉢形をなすが、底部の形状は不詳である。灰褐色気味で焼成は良い。胎土には砂粒を多く含み、センイも認められる。器壁の厚さは6～10mmと不齊一で、体中央部と口縁部に移るあたりが厚くなっている。製作時の粘土積み上げの接合部位とみられ、部分的に段差となるところがある。

施文は、外面は山形文がやや不規則に浅く施され、内面は口縁部のみにやや引きザリ気味に浅く山形の痕跡がみられる。口縁部あたりの外面の施文はやや斜行し、内面では指頭圧で凹凸している。そして内面ほぼ5cm以下の体部はかなり粗にヨコナデの調整である。なお、口縁端は丸味のある平坦にナデて、波状にはならないようだ。

施文原体は4条の山形文を単位としているようで、外面でみると線幅は1.5～2.5mmであり、山の間隔は約10mmであった。仮りに1回転2山とすると回転原体の直径は約7mmとなる。

なお山形文の破片は図示以外にも細片があるが、この同一個体の部分のみと施文等から思われた。

E 条線文土器

71は外面全体に横走する条線を施し、口縁内面には垂直に刻文を押捺する固体である。推定口径27cm器高35cm位か。胎土は砂粒をほとんど含まない粉質で、センイを多く混入している。焼成良好く黄色気味で体部に勧底がある。

器形は口縁が外傾する厚手の鉢形であるが、底部については不明。図示以外に同一個体の細片

17片がほぼ同一地点で出土している。

口縁内側には原体回数による刻線が5cm以上2段に押捺され、外面上端あたりはその際の掌又は指頭の押圧で施文が消えており、口縁端を上へ展ぼしながら外反させているのが見てとれる。2段目の刻線施文は体部内面（ナデ）との接点であり、急な外反口縁への移行部とするもので、結果として2段に屈曲して外反する口縁の形としたもの。口唇部は外面を垂直にナデ上げて先端を尖らせる。結果として若干の波状口縁となっている。体部内面はナデ調整である。

外面は原体回転によるヨコ方向の多条刻線が、底部へ向って窄むあたりから斜行に変わる。施文原体の刻線は、内外面とも5条の単位で、条幅は平均4mm弱、原体の直径は約7mmと推定される。

他に同様の施文の69は口縁端を平坦にナデたもので厚手、70は体部とみられる破片で厚手である。この2点は胎土に砂粒を含み、センイが確認できない点で71と異なる。

F 無文土器

68は内外面ともにナデて無文の口縁部である。口端の内側及び外側端をそれぞれ内・外に削ぐように面とりを行いやや肥厚気味とした。わずかに外反りの口縁部分である。

96は極く厚い体部とみられる破片で、内面指圧、外面は擦りなで状である。胎土にセンイあり。このいずれも器形等は分らない。

他に細片5片があったが、單なる無施文部分なのか否かは不明である。

G 厚手大粒楕円文土器

74~95は概ね大粒の楕円文土器である。このうち74~78、83は器壁が6~8mmでやや薄く、胎土には砂粒を含み焼成が良い。74、75は口縁とそれに続く部位。以下漸次下方へ78は体下部あたりの破片とみられ同一個体かと思われる。なお74と同様のものが他に4片同時出土している。

74、75の口縁内面は太い条線がやや斜めに施され、外面は口縁端近くまで大粒の楕円文である。この内面の斜行する線文は回転押型ではなく、例えば丸棒状を並べたような施文具で引き描きしたように見られる。因みにこの部分の断面では丸底となっていて、しかも条間隔が揃っていることからの見解である。76~78の外面は同様に大粒楕円文は崩れ、内面ナデの体部である。78は内面剥落。

83は、内面は斜行する太い条線とそれに続くヨコナデ、外面は口唇近く指頭圧でつぶれてはいるが長径8mm近い大粒の楕円文である。内面太条線は幅6mm深さ1.3mmを測る。なお外面にはススが認められる。

79は口縁端の内側に短い刻線をほぼ垂直に並べて口唇を尖らせるもので、外面は大粒の楕円を縦列に押す。口唇端はわずかにナデしているのか明瞭でない。80、81は外面大粒楕円文、内面ナデの厚手。82はやや粒が小さい。80には外面にススが付着している。



図8 土器(5)

84は口縁部の小片であるが内外面に施文ではなく、口唇上面と外側面はナデて面とりしている。85・86は同一個体の破片で、口縁端は84とほぼ同様なつくりであるが外面は広くナデ面で、その下方は小粒の楕円文を押している。厚手で胎土にセンイ混入が認められる。また96・97もほぼ同様の体部片で、これにも胎土にセンイが入っている。96は外面に施文は見られない。

87は平頭にナデた口縁で、外面は粗略に中粒の楕円文、内面には楕円文の地をナデ消して口縁端に向って引き上げ状の条線を浅く引いている。

88～91は、外面粗大粒の楕円文、内面は88は細長い粒の施文、89～91はナデである。90の内面には炭化物が付着している。これらの胎土には粗い砂粒がやや多く、89～91にはセンイが入っている。

92～95は外面大楕円文内面ナデであるが、破片の部位によるのか器壁は薄い。またこれらにはセンイ混入は認められず胎土もち密で焼成も良い。

観察の要約と出土地点

以上の個別観察を要約し、特徴を概括すると次のようであり、各出土地点にもまとまりのあるものも挙げられる。

A 細～中粒楕円押型文土器

外面はほとんど楕円文、口縁内面に垂直の刻線を原体回転によって1～2段押捺する。

内面の刻線下にはほとんど楕円文をヨコに施文するものが多く、体部以外はナデて無文である。器形は鉢形で底部はつまみ出し状の尖り底であり、口縁は刻線押捺によって外反し、口唇は波状をなすものがある。器壁は薄く6～7mmであるが、楕円粒のやや大きいものは厚さ8mm程度のものもある。

このやや厚いものの外面は楕円粒列が斜行するものが多いようだが、これを明らかに区分することは難しい。仮にこれをA' グループとすると、Aとの差異は器壁の厚さが目安となるが、これも器の大きさの差異であるかも知れない。

以上のA～A' グループの胎土は、粗砂が少なく均質で焼成は良く、センイはほとんど含まれない。

当該遺跡ではこのグループが総破片数の70%以上を占め、出土ポイントも平面図上グループの1、3、4、5、7の各点で密分布し、その範囲は最も広い。

(図No A…1～9、16～25など。A' …11～14、26～46など)

B 中厚手の楕円押型文土器

器壁の厚さ8～10mmほどのものについては出土資料が少數であることから、口縁部付近についてのみの観察である。

口縁部外面はやや大型の楕円文が概ねタテに並び、端部内面には平行短線状2段の刻線で、強く押圧されたことにより外反して内剥ぎ状の口縁となっている。

胎土にはセンイの混入が認められる破片もある。

分布は調査区東端部分に点在し、グループを成していない。

(図No62～67など)

C 縄文土器

燃りの強い単節L縄文を器表全面に施し、内面は体部がナデ（上方はヨコナデ、下方はタテナデ）である。口縁部及び底部については不明。厚手で、器形はやや人ぶりであろう。胎土にはセンイを含む。

分布は地点8で集中出土し、すべて同一個体の破片とみられた。

(図No61)

D 山形文土器

底部は不明。鉢形で口径は30cm弱か。器表は全面斜行する原体回転押捺の山形文。内面は口縁部のみやや引きずり気味の山形文で、以下は無施文（ナデか）器壁断面で4～5cm毎に厚い部分が巡り、組積みの重ね部であろう。厚さは6～8mmほど。胎土には砂を多く含みセンイを認める。施文原体の山形は4条又はそれ以上とみられる。出土分布は地点3にほぼまとまる。

(図No73)

E 条線文土器

口径27cmほどの鉢形で、やや波状をなす口縁は薄く短かく外反する。底部は尖るようだ。

器表は横走する多条文で、底部近くは斜行するなど方向が乱れる。内面は無文で、口縁端部は1～2段に原体押圧による垂直の多条線とし、その外側は指頭圧によって条線文が消され、また器壁も薄く、アクセントを付けて外反する。上唇は外側をナデて削り状とするものもある。

施文原体は5条であろうか、条線の間隔は約4mmである。

胎土は密で砂を含みセンイの混入もある。器壁の厚さは8～10mmとやや厚手の部類に入る。

出土は地点2のみである。

(図No69～71)

F 無文土器

内外面とも無施文のものは極く少なく、全くの無文土器であるかもはつきりしない。

器壁は厚く、センイ入りであり、焼成はやや弱い。出土は7地点でみられた。

(図No68、69)

表2 土器観察表

図No	施文	内面	外面	構造寸法×mm		色	調	厚さ	焼成	胎	十備考	取り上げNo種別
				外面	内面							
1-1	ナデ	無線・ナデ		5.0×3.2	に5.0×3.2	黄褐色	黄褐色	5.5~6.0	良	細砂含	C5N-49・53 A	
2		n		4.6×3.2		黄褐色	黄褐色					-39
3		n										-52
4		n	?									-38・48
2-1	ナデ	刻線・ナデ	5.8×3.6	4.7×3.0	に5.8×3.0	黄	暗	8.0	良	微砂多く粗砂もあり	C5EN-5 A	
2		ナデ										-6
3	ナデ	刻線?										
4	n	刻線		3.6×2.7								
5	n	n	6.7×2.6	6.4×2.3	に5.8×2.3	黄褐色	黄褐色	5.5~7.0	n	微砂含	C5N-33	
6		n	6.1×3.6		に5.8×3.6	淡黄	黄褐色	5.2	良	細白英粒	C5N-10 A	
7		ナデ?	4.8×2.5		に5.0×3.0	黄褐色	黄褐色	6.2	やや良	長石砂粒含	C5E-20	
8		刻線	6.9×2.8	7.0×2.8	に5.8×2.8	黄褐色	黄褐色	8.0	n	微砂含	口端丸り	05~40
9		ナデ?	5.0×3.4	5.5×3.9	に5.8×3.9	黄褐色	黄褐色	8.5	良	粗砂含	C5N-17	
10		n	6.2×2.2			黄褐色	黄褐色	8.1	n	土均質微砂多	C5N-61	
11		n	7.2~6.8×2.3~3.0	6.0×2.0	に5.8×2.0	明黄褐色	明黄褐色	7.5	n	微砂含	8と同團体?	A~E5-43
12		刻線	4.8×1.4	6.0×2.0	に5.8×2.0	黄褐色	黄褐色	8.1	n	n均質	D5EN-27	
13		ナデ	10.0×2.9			黄褐色	黄褐色	7.3	n	ち密	内ナデ入念	D6E-42 A
14		n	5.7×1.8	6.0×2.4	に5.8×2.4	黄褐色	黄褐色	8.2	n	n	D6EN-29	
15		n	5.1×2.8			浅黄褐色	浅黄褐色	6.1	やや良	まれに粗砂	D4EN-6	
16		ナデ?	6.7×3.5?			明黄褐色	明黄褐色	9.1	やや弱?	粗砂含	C5N-23	
17		剥落	4.9×2.7			浅黄褐色	浅黄褐色	?		唇毛	D3N-5	
18		n	5.3×2.7	—		黄褐色	黄褐色	?			C5N-6 A?	
19		破損	5.2×2.7	—				?			C5 26	
20		n	5.8×3.0	—				?			C5 25	
21		刻線	5.8×2.6	4.5×3.5	に5.8×3.5	淡黄褐色	淡黄褐色	5.1			C4E 18・37 A	
22		粗ヨコナデ	6.9×3.0		に5.8×3.0	黄褐色	黄褐色	6.4~8.4	良		C4E 7	

23	押判タブリ	6.2×4.0	6.4×4.1	に5mm黄緑		6.1	良		7と同體外 刺繡3,6~4.0mm	C4EN-4	A
24	ヨコナデ	刻縫	4.2×3.2 (刻深0.8)			7.8				CAN-38	
25	押型タブリ	ナデ	7.1×3.5	[に5mm] 黄緑	浅黄緑	やや暗	6.8	やや良	ち悪	E5-25	
26	消	刻縫	(4.6×2.4) 5.0×2.6	H	H					E5-21	
27		ナデ	5.7×1.6 5.7×2.8	H	H					E5-28	A'
28	消	H	6.0×2.2	H	H				圓一體体 外面マスク付着	E5-27	
29	ナデ	H	6.2×3.3	[に5mm] 黄緑		8.3			外押型のうちデ番	C4E-3	A
30		H	5.0×1.9	[に5mm] 黄緑		7.0	並	細砂粒含	内上端ダム痕跡	E5-23	
31		H	6.5×3.8	H	H				外面着毛	E5-26	
32		H	5.0×3.3	H	H				ダ円文タブリ定位	E5EN-6	
33		H	6.7×3.0	H	H					E5-30	
34	下ナデ	H	6.2×3.0	[に5mm] 暗	浅黄緑	やや暗	7.1	やや良	下端ナデ?	E5E-18	A'
35		H	(3.8×2.4) 6.5×2.8	[に5mm] 黄緑	明黄緑	暗	5.0~6.7	良	内指頭左痕	D5EN-23	
36		H	5.5×2.9	H	H				押型引きさり) 口味	F5-37	
37		H	5.6×2.6	H	H				外文引きさり	F5-33	
38		H	4.1×2.9	灰黄	[に5mm] 黄				36と同體?	F5-33	
39	ナデ		6.0×2.5	4.9×2.7	暗	に5mm黄緑	7.1	並	微砂粒質	I3と同體	D6EN-21
40	重丸押文	H	6.5×4.3	H	H				13と同體	F5-34	A?
41	ナデのうち底文		(4.2×1.9?) 3mm	縫縫3,1mm	明黄緑	やや暗	7.2	良	39と同體	F5-37	
42		H	7.4×2.8	[に5mm] 黄緑	浅黄緑	暗	6.8	良		E3EN-48	
43		H	7.4×3.4	6.8×3.4	[に5mm] 黄緑	明黄緑	7.7	良	内ナデのうち底文	I3N-27	A'
44	ナデ		(4.2×1.9?) 3mm	縫縫3,1mm	暗	やや暗	6.2	良	細砂粒含	B3N-46-47	
45		ナデ(第)							押文タブリ	C6E-11	A'
46		H	5.3×4.3	H	H				外口端ナデ折返し	E6-11	A'
47	タブリ	H	5.3×4.3	H	H				※	同一體	C6E-13
48	つぶ気味	H		H	H				※	外マスク付着	C6E-6
49	(<ナデ?)	刻縫		H	H				※	外マスク付着 引きさり?	C4E-12
50	(ナ)	ナデ	6.0×3.5	H	H				※	内外脂膜生ナデ	C4E-N-7
51	ナデ	H		[に5mm] 暗	浅黄緑	やや灰	8.7	やや良	微砂粒含	E-3-19	B

図No	施 文	格子サイズ mm	色				調	厚さ mm	焼成 (*印セシイ入り)	備 考	重り上りNo	種別	
			外 面	内 面	外 面	内 面							
52	外 面 内 面 ナデ	5.1×3.5 5.0×3.0	刻縫	[ニ]5.1×4.9	—	—	やや暗	4.7	良	微砂含	C4EN-8	A	
53	ナデ	6.0×3.9	—	—	—	—	—	6.0	—	—	C4-58	A	
54	ナブリ	n	5.5~6.0×4.1	5.9×3.1	—	—	—	7.4	—	—	A8-27	—	
55	n	5.7×2.5	—	—	—	—	—	7.1	—	内下端ナデ	A8-18	—	
56	n	?	—	—	—	—	—	—	—	細片	C4-64	—	
57	n	5.1×3.3	—	—	—	—	—	—	—	—	A8-17	A?	
58	n	?	—	—	—	—	—	—	—	—	A8-25	—	
59	n	4.8×2.7?	—	—	—	—	—	—	—	—	A8-9	—	
60	半ナゲナダ ナゲナダ	幅4.9×2.3	網目 網4.9×2.3	[ニ]5.1×4.9	—	—	やや暗	—	—	—	A8-7	—	
61	彌文	ツブレ	6.2×3.8	?	[ニ]5.1×4.9	—	やや暗	10.4	やや良	砂含	A8-24 ¹⁴⁸	C	
62	押文弱	弱神文のちナデ	7.6×3.8	—	n	—	やや暗	8.2	やや良	砂含	E6E-33	—	
63	押文弱	粗ヨコナデ	8.6×4.2	—	n	—	灰	9.2	並	粗砂含	E4E-30	—	
64	粗ヨコナデ	2段短線	?	□密短線 2段0.5mm	—	—	—	10.8	n	砂多く含	E4E-36	B	
65	押文弱	無(斜)	8.6×4.2	—	—	—	—	7.5	やや弱	ち密	F5-35	—	
66	押文重複	やや大ナダ	7.0×3.0	7.9×4.3	[ニ]5.1×4.9	—	暗灰	10.4	並	粗砂あり	F5-39	—	
67	やや大 のち押文	—	—	[ニ]5.1×4.9	—	—	やや灰	6.7~8.4	やや良	あまりにち密	F5-40	—	
68	ナデ	擦~粗ナデ	—	—	[ニ]5.1×4.9	—	やや灰	8.3	やや弱	粗砂あり	※	F5-38-27	
図No	施 文	色				外 内	線		(*印セシイ入り)	備 考	出上区	種別	
		幅	深	幅	深		内	外					
69	ナデ	条線・強き	3.2	0.6	—	—	明黄	—	やや暗	7.8	やや良	砂まれにあり	C3EN-8
70	—	2.5	0.8	—	n	—	—	—	—	7.5	良	細砂まれにあり	C3BN-9
71	—	3.5	?	3.5	?	[ニ]5.1×4.9	—	やや灰	7.4~9.1	n	—	—	—
72	—	?	—	—	—	—	—	—	—	9.0以上	並	砂まれにあり	C4B-14

G 大粒柄円押型文土器

器形については明らかでないが、器壁はほとんどが8mm以上で14mmものものもある。しかし稀れに部位によるのかやや薄い破片もある。また多くはセンイの混入が明らかである。

施文の最も特徴的な点は、大きく外反する口縁内側に太く斜行する平行沈線を引くことと、器壁外面の縱走る柄円文のサイズが長径9mm以上であること。しかし、まれに口縁端近くの内外面をナデ消したものもある。

出土分布は、Aとしたものとは中心が異なり、東に偏って調査区域外へも続くものとみられる。

(図No51、No74~79)

様式と年代観

上記のようにA~G群に区分観察したところを、比較的近い位置に所在する代表的な縄文遺跡である帝釈遺跡群の編年に照合すると、馬渡3下層や観音堂19中層、馬渡3上層、観音堂19上層のうちに包含するものと考える。広くみれば黄島式古段階、黄島式新段階、そして高山寺式に相当し、縄文時代早期中葉から一部後半にかかるものと考える。

	土器様式	帝釈遺跡群	国竹遺跡	島根県東部	鳥取
I	上黒岩 9	馬渡4			
II		弘法淹15			
III	上黒岩 6	観音堂20・21 弘法淹14 etc			
IV		〃 13下~14		下 堀 山 田	上 福 沢 万
早 期	V 1	〃 13下		普 上 泽	
	2 神宮寺	観音堂19下		○ ○ ○	○
	3	堂面・弘法淹		○	
	4 黄島(古)・上黒岩 4	観音堂19中・馬渡3下	A (A')	○ ○	
	5 黄島(新)	馬渡3上	B~E	○ ○ ○	
	6 高山寺	観音堂19上	G (F?)	○ ○ ○	○
	7 〃 (新)	弘法淹・観音堂			
	8 穂谷	堂面12・弘法淹			
VI	1	観音堂18・堂面の粗大円1併出			
	2	〃 18			
	3	寄倉12・観音堂17・堂面10・馬渡2下		○	菱根
	4	〃 11			○

※日本土器事典1998 (川越・河原) と文献P34 1, 2, 3による

2 石器類について

第2～第3層で出土した石器及び剥片等の総数は数100点を数えるが、その多くは第2層を中心とするもので、明らかに第3層出土と記録されているのは石鏃2点・石錐2点・剥片8点のみで、他に記載不備であるが該当するとみられる石鏃1点がある。このほかにもあるものと思われるが記録不備であり、ここにはとりあげないこととする。

1) 石鏃

石鏃は3点でいずれも凹基無茎式である。1はE 8区、2はC 7区の出土である。3はC 5区で第3層上部の出土と推定されるもの。

1は黒色の黒曜石製で全長31mm、翼の一方を欠くが幅21mmほど、厚さは最大4.0mm、重さは1.10gである。形態は3類に属す。

2は同様の黒曜石製で全長27mm、幅19mm、厚さ4.0mm、重さ1.20g。抉りは逆U字形のいわゆる鉢形鏃で、第4類である。

3は安山岩製で片翼を欠くが全長28mm、幅22mm、厚さ2.5mm、重さ1.45g。抉りは浅く、第2類に区分される。

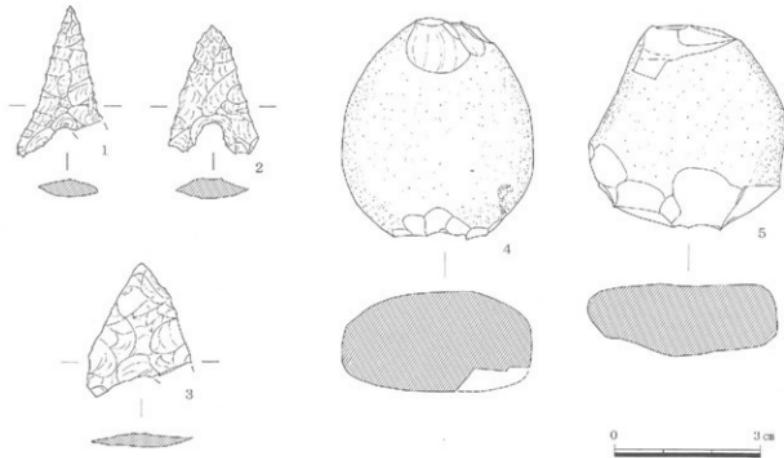


図9 石器

2) 剥片

剥片については写真のみを掲げているが、観察の概要は次表のようである。

表3 剥片の観察表

No	形状	石質	サイズ(長×幅×厚) mm			重さ g	出土区	補記
1	剥片	黒曜石	19	17	5.5	1.93	A 8	一部に自然面残る
2	"	"	41	28	9.5	8.85	E 5	片面は自然面
3	"	"	21	14	3.5	0.92	E 3	薄い剥離片
4	"	メノウ質	25	22	7.5	1.96	D 8	曲面のある剥片
5	"	安山岩質	26	19	13.5	3.07	A 8	破片状
6	破片	石英	29	21	11.0	6.66	C 4	破碎片状
7	剥片	水晶	25	11	4.0	1.30	F 5	綫長状剥片
8	"	"	20	14	5.0	1.00	E 4	"

3) 石錐

石錐2点はいずれもC 4区で、ともに閃緑花崗岩の自然形の扁平な円礫を用い、両端を打ち欠きしたもの。4は49.8g、5は34.0gを測る。

VI むすび

国竹遺跡調査での縄文早期資料の集約を目指したが、結果として不備が目立つこととなった。特に、掘り込んだ遺構ではクロボク土を除いて地山面に到ってはじめて検出したものの、上層からの黒色土との判別が難しく、縄文早期と特定し難いものが多い。しかし、縄文早期以降弥生期までの無遺物堆積土層が比較的厚いことから、状況判断したものも少なからずある。

このようにして造構は、柵状に直線に配列する2条の杭穴状ピット列と、住居跡を思わせる円形プランの小柱穴状ピット群を挙げ得た。

また、陥穴遺構は小判形で、深さ1.0mのフラットな坑底に1～5本ほどの杭穴があり、地形を横断する直線上に配列している。これは、例えば居住管理区域を画するものかとも思わせる。

土器についてはA～Gに区分したが、大部分は小～中粒の楕円押型文で黄島式相当であり、厚手器壁のセン入りで大粒化した楕円文の高山寺式は少なく、当該遺跡の縄文期はこの限られた期間のみであった。このことはまた共伴する各様式をも示すものもある。

黄島式を自安に同時期の遺跡分布を、先学の文献等によって概観すると、山陰山陽にまたがる奥山間地帯と、瀬戸内沿岸地帯とに大まかに二分している。またこの頃が繩文海進の時期とされることもあり、両者には生活の様相にも差異が予想されよう。

ここに提示した国竹遺跡の資料は不備ながら、今後の早期縄文期の検討に資する一端に加えられることを希うものである。

図10 雲・石・伯・備・作地方の主な押型文の遺跡



黄島式を中心とする押型文土器の主な分布（遺跡数）

島 根	石見西部	(浜田、津和野、六日市) 4	文献 1
	石見東部	(瑞穂) 5	
	出雲部	(横田 5、赤来 1、広瀬 1) 7	
鳥 取	西 部	(西伯郡 15、日野郡 10、米子市 1) 26	文献 1
	中 部	(東伯 5、倉吉 3) 8	
広 島 備 後	安芸地方	3	文献 2
	山間部	4 ~	文献 3
	瀬戸内沿岸～平野	4	
岡	北 部	11 ~	文献 3
	山 南部～沿岸部	8 ~	

文献 1) 角田徳幸：『堀田上・他遺跡の調査報告』島根県教委 1991

2) 松崎寿和：『広島県の考古学』吉川弘文館 1981

3) 近藤義郎：『吉備の考古学』福武書店 1987

図 版



遺跡遠景
～町から見上げて～



調査前の状況

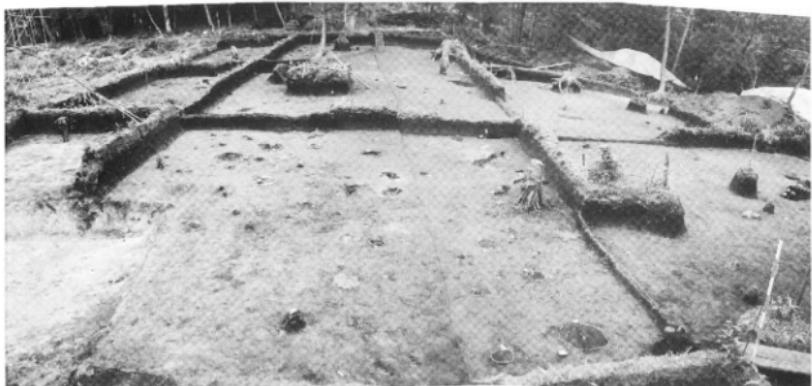


発掘面の一部と
眼下に横田町の町並み

調査区全景
(8月末
上空から)



第3層掘り下げ
(C 6 区付近
北から 7月初)
↓



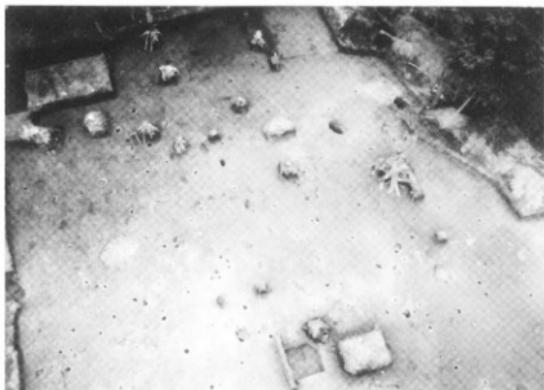
C 6 区付近
(7月中旬)



第二次調査
完掘状況
中心部付近
7月末
(南から)

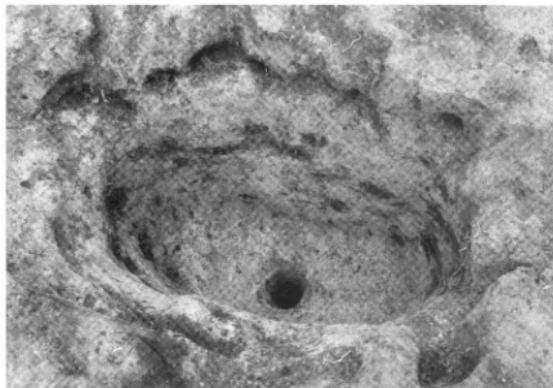


(東から)



(低空から)

PL4



陷穴遺構
B 4 区



陷穴遺構
E 4 区



第3層土器片
出土狀況



第3層土器出土状況



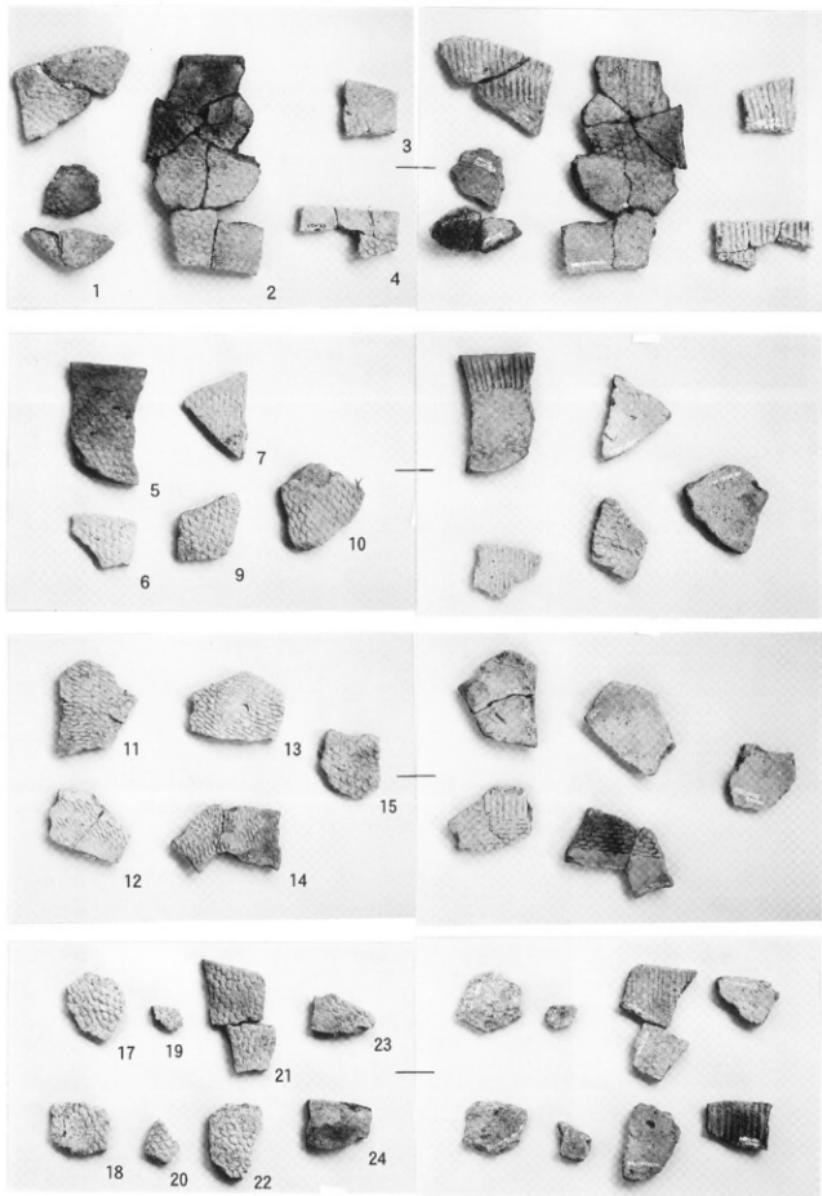
現地説明会

三浦清先生による

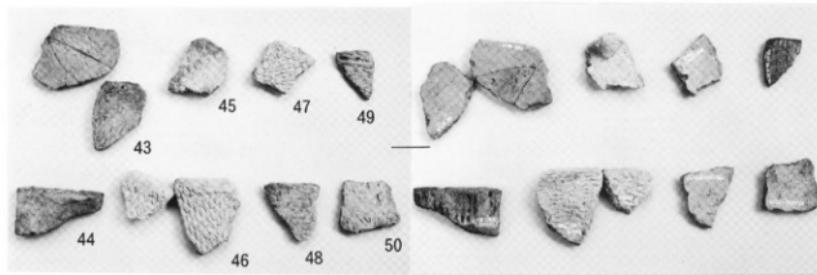
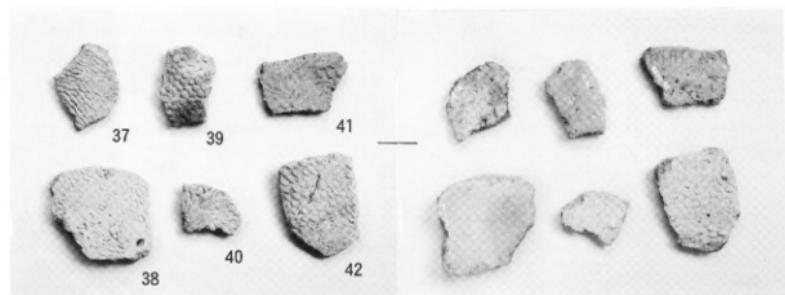
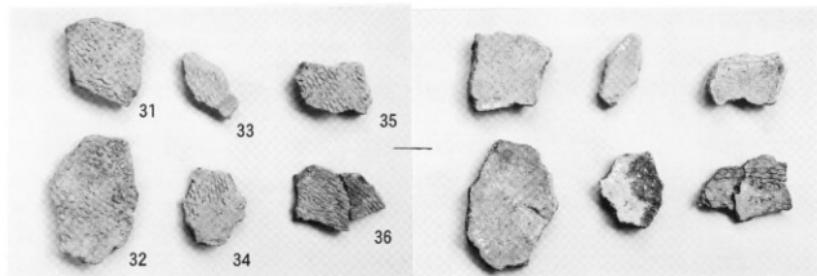
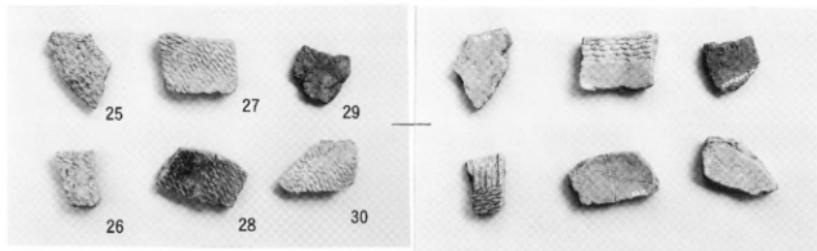
地層の説明

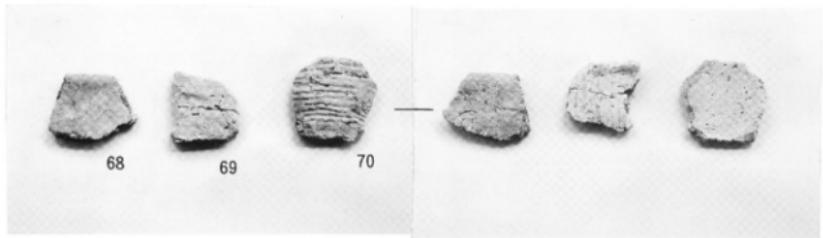
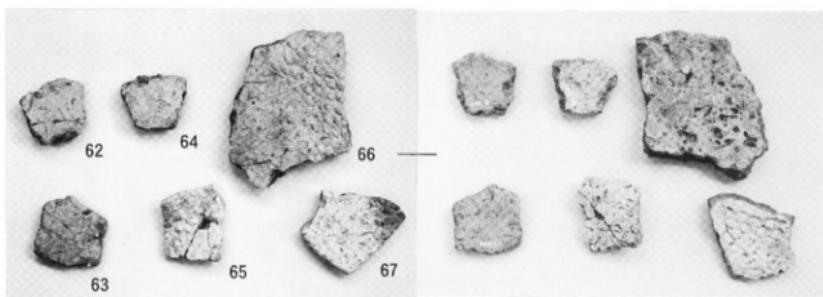
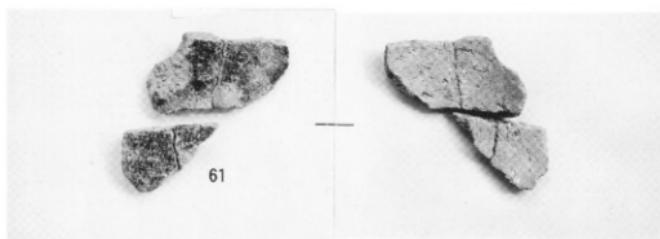
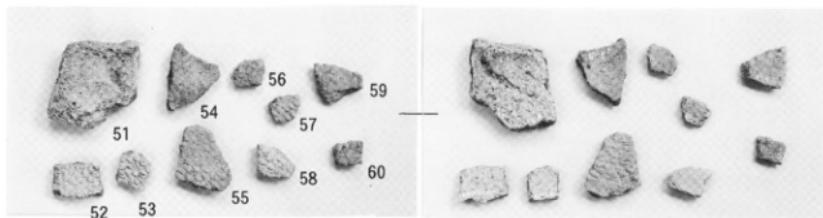
7月26日

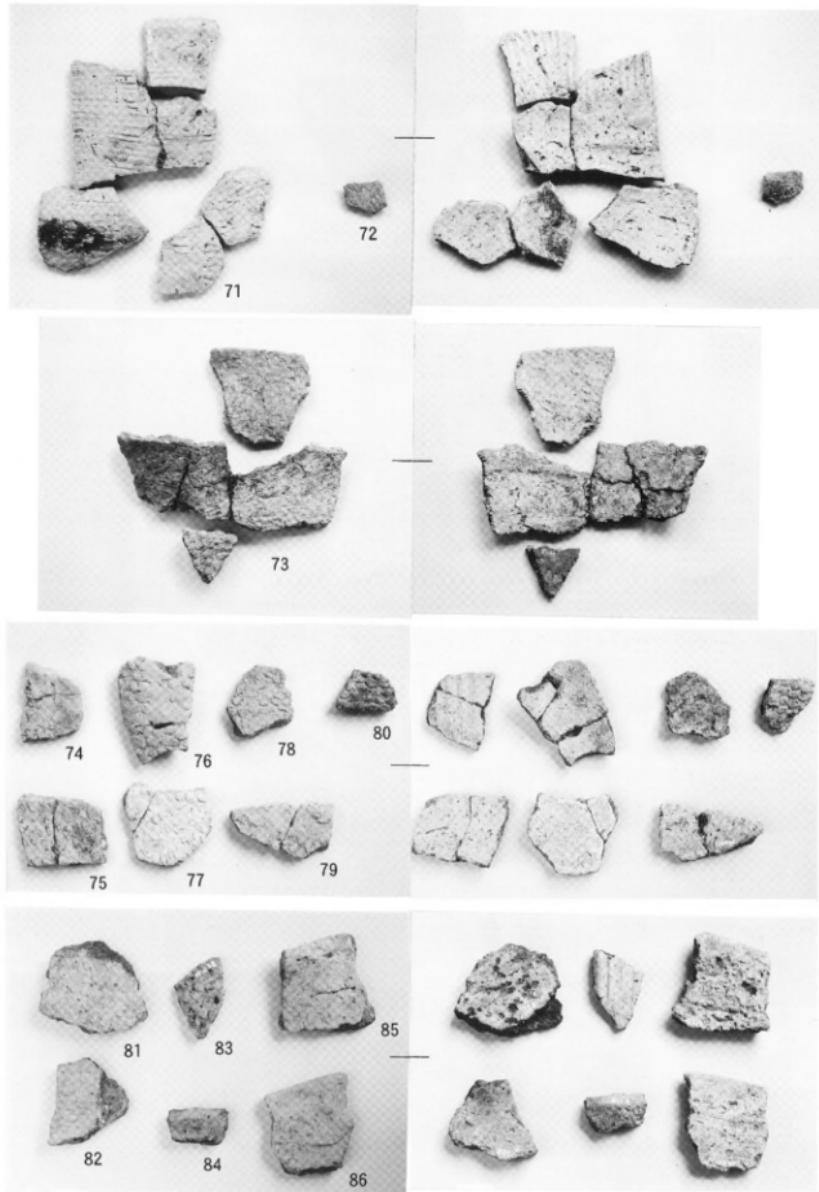




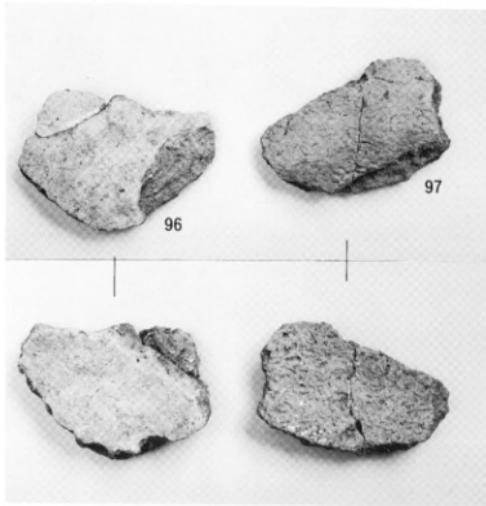
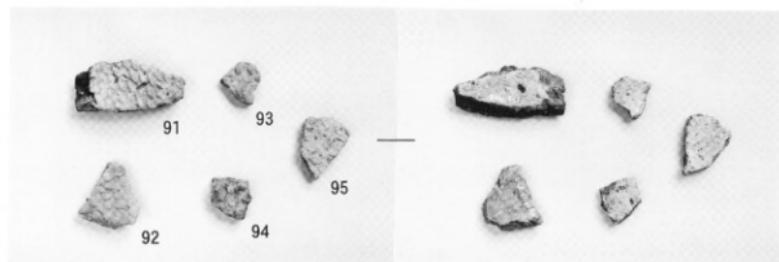
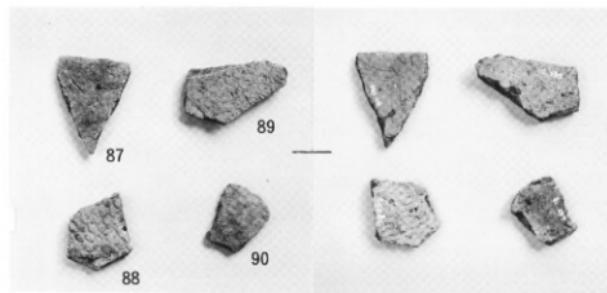
土器 (1)







土器 (4)





石 鐛

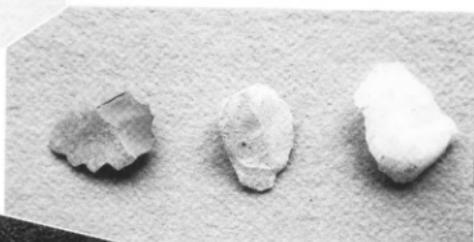


石 錘

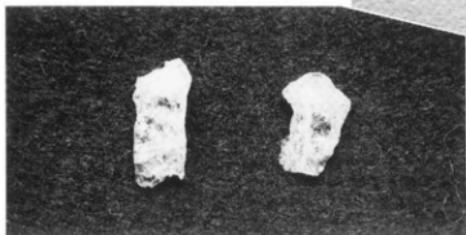


剥 片

(黑曜石)



[安山岩]
〔 石 英 〕



(水晶)

石 器

報告書抄録

ふりがな	くにたけいせきちょうさ							
書名	国竹遺跡調査							
副書名	第3層（縄文早期）の成果							
編著者名	杉原清一・藤原友子							
編集機関	奥出雲町教育委員会（埋蔵文化財調査室）							
所在地	〒699-1832 島根県仁多郡奥出雲町横田1037 TEL 0854-52-2680							
発行年月日	西暦2006年12月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くにたけいせき 国竹遺跡	しまねけんにたぐん 島根県仁多郡 きゆう おでたからうのおあし (旧)横田町大字 よこた 横田1375-1 他	32341	M147	35° 10'	133° 05'	19870508 19871130	1900m ²	企業誘致
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
くにたけいせき 国竹遺跡	散布地	縄文 弥生	柱穴群 樅列 陥穴 竪穴住居跡 墓坑	縄文式土器 弥生式土器 鉄器 砥石	早期押型文土器 鉄斧 分銅型土製品			

国竹遺跡調査
第3層（縄文早期）の成果報告

2006年12月1日

発行 奥出雲町教育委員会
島根県仁多郡奥出雲町横田1037番地

印刷 (有)木次印刷
島根県雲南市木次町里方84番地34

